

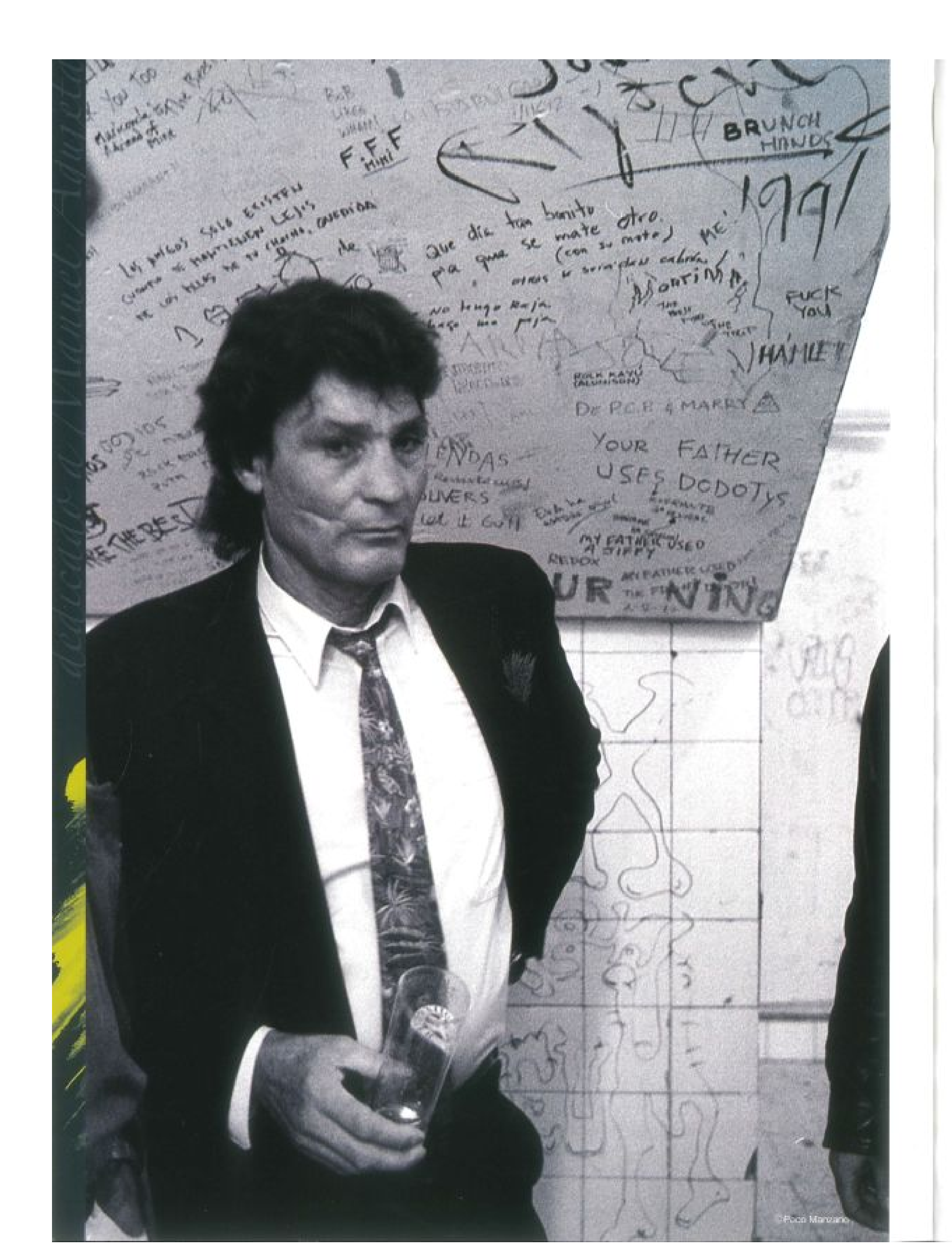
追悼特集

マヌエル・アグヘータ ヒターノの歌

2015年12月25日クリスマスの日に、ヒターノの中のヒターノ、マヌエル・アグヘータが旅立った。
カルロス・サウラの映画『フラメンコ』で、眼光鋭い風貌と血が滲むような歌声で衝撃を受けた人も多いだろう。
一度観たら忘れられない強靭な存在を讃え、ここに追悼特集を捧げる。

MANUEL AGUJETAS

文／東敬子
リード／編集部
写真／フアン・カルロス・トロ、パコ・マンサーノ、ドミニク・アベル、パコ・サンチェス、マヌエル・デ・ラ・フエンテ・チャコン
参考資料　CDブック『エル・アグヘータ　24キラーテス』(2001)
協力／ドミニク・アベル(dominiqueabel.com)、エステラ・サタニア、アントニオ・ソト、フアン・カルロス・トロ
Texto por Keiko Higashi
Fotos por Juan Carlos Toro, Paco Manzano, Dominique Abel, Paco Sanchez y Manuel de la Fuente Chacón
Documentación: "Manuel de los Santos, El Agujetas, 24 Quilates" (2001).
Agradecimiento especial a: Dominique Abel (dominiqueabel.com), Estela Zatania, Antonio Soto, Juan Carlos Toro.



©Paco Manzano

追悼特集

マヌエル・アグヘータ ヒターノの歌

「フラメンコじゃない。カンテ・ヒターノだ」

それが、「生きる神話」と呼ばれた歌い手マヌエル・アグヘータが、人生を捧げたアルテでした。

フラメンコはカンテに始まり、カンテに終わると言います。カンテが無ければギターも、踊りも、ない。そしてカンテに耳を傾けていると、時折、衝撃的な声にぶつかる。それが、ヒターノが歌うカンテ。

なぜ衝撃的かと言えば、それはひとえに私たちが想像し得ない、何百年も続いた彼らの壮絶な過去が、一瞬にして今の現実となって目前に現れるから。

マヌエルはこう言いました。

「真実を歌うんだ。何が起こっているか、そして何が起きたかを。歌う理由がなければ、歌うんじゃない。書くんじゃない。描くんじゃない。表現する理由がなければ、意味は無いんだ」

ヒターノは、決して忘れないのです。彼らが体験した心の痛みは、親から子、子から孫へと、脈々と受け継がれ、今なお、声と共にその存在を主張する。苦渋と絶望、排斥と束縛、それ故に執着する自由と生きる喜びへの渇望は、彼らにしか表現できない、真実の叫びなのです。

しかし、現代にあって、彼らのアルテは、少数派になりつつあります。馴染み易い、一般受けする華やかなカンテが第一線を彩る、「売れる」ことが大前提である時代。それについていけない者は、隅に追いやられる。ヒターノの絶大的なアイドルだったカマロンの没後、特に21世紀に入って大御所たちがこの世を去って行くにしたがって、それは顕著になりました。

同時に、いわゆる〝パジョ〟の若手が人気を得るようになり、大会場を埋めるようになると、プロモーターにとっては扱いの難しい、価値観の違う彼らヒターノは、次第に敬遠されるようになりました。現代では、アルテがどんなに素晴らしくても、確実に仕事をこなしてくれる、「はい、はい」と言うことを聞いてくれる、それを重視するやり方を受け入れなければ、仕事自体、出来ない時代なのです。

しかしマヌエルはブレることなく、自身のやり方を、自身の歌を貫きます。彼には、今の風潮が理解できない。そのため、時代の追随者を、歯にもの着せぬ物言いで批判することもしばしばでした。そしてその言葉は、時に批判を通り越し、言葉の暴力と受け取られることもありました。その為に、彼にはいつも「破天荒な」という形容詞が付いてまわりました。

しかしそれでも、絶対的なカリスマ性を持つその歌声は、人々を決して放しませんでした。彼は、晩年に受けた「ボス・デル・スール」のインタビューで、こう語っています。

「チョコラーテ、テレモート、パケーラ、マイレーナ、カマロン……、俺が世に出たとき、彼らはすでにそこにいた。最後に世に出たのが俺だった。

それからずっと、俺はフラメンコ・プーロ(純粋なフラメンコ)で戦ってきた。みんな居なくなって、何でもかんでも〝モデルノ(現代風)〟になった。でも、俺は辞めやしなかった。そして今少しずつ、皆がフラメンコ・プーロに戻り始めているんだ……」

マヌエルは、惜しまれつつ、2015年12月25日クリスマスの日に、闘病中だった癌がもとで、ヘレスの病院にて、76歳の人生を閉じました。

彼の死をもって「一つの時代が終わった」と言う人も居ます。しかし、彼自身は決して、彼の死をもって何かが終わるとは言わなかった。彼が天に旅立った時、それは、親から子へ、子から孫へ、永遠に続く愛が、歌と共に空に放たれた瞬間だったのです。それは、彼が若い世代に贈った、新しい時代へのエールでした。

そして彼は、正しかった。

今や、カンテに限らず、全てのアーティスト達が、フラメンコの本質への帰途を辿っています。彼が信じたカンテ、彼が決して手放さなかったその〝家〟に、フラメンコが帰り支度を始めているのです。

自由に、奔放に

マヌエル・デ・ロス・サントス・パストールは、1939年ヘレスに生まれたと言われています。しかし、この時代のヒターノには良くあることですが、出生を届け出なかったので、本当の生年月日は、実はわかりません。マヌエル自身もずっと、自分の正確な年齢が分かりませんでした。

「書類は何もない。そこいらの野うさぎと同じさ。でも、それで良いんだ。俺は自由に生まれ、自由を生きている。神様に感謝しているよ」

だから、76年と言われる生涯は、本当は80年だったかも知れないし、75年だったかも知れない。でも彼にとっては、そんな歳という概念に囚われない、人生を全うした、自由を謳歌した人生の時でした。

ともあれ、明確に判っていることは、彼が、偉大なフラメンコの家に生まれたと言うこと。

父マヌエルは、ルビーチ、ボネオ、チャラオの家系を継ぐカンテの名人で、「エル・アグヘータ(後のアグヘータ・ビエホ)」という愛称で呼ばれていました。母アナも、「エル・マンコ・フスト」(マヌエルの祖父)と呼ばれた父の下、カンテに親しみました。我らがマヌエルは、そんなフラメンコな環境の中、鍛冶場で父の仕事を手伝いながら、カンテを学んで行ったのです。

マヌエルのほかにも、男が5人、女が4人の9人兄弟のうち、ディエゴがプロのカンタオール、アンヘリータとファナもセミ・プロの道を辿り、後にマヌエルの子供たちドローレスとアントニオも歌い手となって、「アグヘータ」の名を継ぎました。

マヌエル・アグヘータは父、そしてマヌエル・トーレのカンテを教科書にして、その才能を目覚めさせていきます。そしてファン・タレーガ、マイレーナ、チョコラーテと、自身のアイドルたちからプーロ・フラメンコをどんどん吸収し、自分の歌を作り上げました。

そして1970年、同郷のフラメン

コ識者マヌエル・リオス・ルイスの薦めでアルバムを録音する機会に恵まれ、ヘレスを後にし、マドリードへと居を移します。そして、プロとしての本格的な活動を開始しました。

「タブラオは好きじゃなかったし、ペーニャで歌うのもいやだった。特に、酔っ払いの為に歌うのは我慢ならなかった」

とは言うものの、ペーニャやタブラオ「カフェ・デ・チニータス」に出演を重ね、マドリードのアテネオ劇場で、マノロとイシドロ・サンルーカルのギターでリサイタル・シリーズを行い、72年には「マヌエル・トーレ国家賞」、そして77年にはヘレスのフラメンコ学会より「カンテ国家賞」も受賞しました。

その後、アメリカへと旅立ち、ニューヨークで活躍。その流れからメキシコ、日本、オーストリア、フランスと、歌いながら世界中を回ります。そして80年代半ばに、カディス県のロタに手作りの家を建てて、やっとスペインに腰を落ち着かせました。

1987年に重い病を患った際は、マヌエル・リオス・ルイスが音頭を取り、ヘレスで、彼へのオマージュ公演が行われ、数多くのアーティストが集まり、彼を支援しました。

痛みのカンテ

アグヘータは、45年のキャリアの中で、13枚のソロアルバムを製作しました。中でも、マノロ・サンルーカルの伴奏で72年に発表したデビューアルバム『ビエホ・カンテ・ホンド』、98年、マドリードのコルマオ「ラ・ソレア」でライブ録音されたクーロ・デ・ヘレス伴奏による『エン・ラ・ソレア』、そしてエンリケ・デ・メルチョール伴奏で17曲収録された2001年発売のCDブック『24キラーテス』が代表作と言えます。2012年にはCD5枚組みの『ヒストリア、プレサ、イ・ヴァングアルディア・デル・フラメンコ』が発売されました。

伝統を守る"純粋な"フラメンコを追求した彼ですが、後のスペイン音楽界に多大な影響を与えた、アンダルシア生まれのロック・バンド「スマッシュ」と、レコードのAB面を分け合った、『ヴァングアルディア・イ・プレサ・デル・フラメンコ(前衛と純粋なフラメンコの競演ほどの意)』(1978)という、変わったアルバムも残しています。

スマッシュの収録曲はいわゆるフラメンコ・フュージョンも含みましたが、マヌエルの収録曲は、マノロ・サンルーカルの伴奏で歌うカンテ・ホンドでした。ですから、これは"共演"ではなく、二つのグループのコンピレーション・アルバムになるわけですが、一枚のアルバムに、伝統と現代音楽という、水と油のように相反するスタイルのグループを入れたという、当時にしては奇天烈なアイデアには(きっとマヌエルは激怒したでしょうが)、中々、興味深いものがあります。

当時の頭が固かったオーディエンスに扉を開いたと言う点では、後にフラメンコ・フュージョンに金字塔を立てた、カマロンがドローレスと競演した『ラ・レジェンダ・デル・ティエンポ』(1979)、エンリケ・モレンテがラガルヒータ・ニックと競演した『オメガ』(1996)への架け橋的存在になったとも、言えるかも知れません。

©Paco Manzano


©Dominique Abel

映像では、カルロス・サウラ監督映画『フラメンコ』(1995)でマルティネーテを披露し、その飾りの無い原始的な、魂の歌で、強烈なインパクトを残しました。また、フランスの女性監督ドミニク・アベル渾身のドキュメンタル映画『アグヘータ、カンタオール』(1998)には、彼の全てが詰まっています。

2013年には、ヘレスに、アグヘータの像が設置されました。自宅があるロタへ続く道の入り口を見つめるその像を前に、彼は、笑顔を浮かべたと言います。

そして写真家ファン・カルロス・トロが製作した壁画プロジェクトによって、その歌う姿が今も街を彩っています。

数々のアルバムと、少しだけある映像と、絵と、写真、それらからは、もう二度と、彼のあの生きた歌声を聞くことは出来ません。けれど、彼が私たちの心に残した、痛みの熱は、いつまでもそこにある。

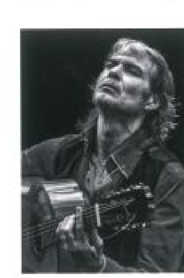
マヌエルは、晩年もフラメンコ・フェスティバルに出演するなど、ステージに立ち続けました。2015年、亡くなるその日まで、マヌエル・アグヘータは、他の誰でもない。自分。であり続けました。その歌も、生き方も。

彼のその頑固一徹な生き様に、背を向ける人も多かった。しかし、魅了されて止まない人でもありました。多くのアフィシオナードが涙を流した、あの衝撃は、いつまでも消えることはないのです。

アントニオ・ソト
Antonio Soto
ギタリスト

「僕は、彼の晩年の17年間、彼の伴奏を勤めた。その中で、僕とマヌエルは、公私共に強い絆を築いた。マヌエルといることは、終わりのない勉強だった。彼は本物のフラメンコ・プーロ。彼の歌はいつも、新しい何かで僕を驚かせた。彼がいなくなり、僕は今、親を亡くした孤児のように、とても心細い。そして、心底、残念に思う。

思い出話は沢山あるけど……。そうだ、カフェに行くと、彼は必ずコーヒーを頼んだな。それでウエイターに、こう言うんだよ。〈ブラックを一つ。でも、ゆっくり、ゆっくり淹れてくれよ。ベルトを緩めて、トイレに駆け込まないでいいようにな〉ってね。マヌエルらしい(笑)。独特だったからね、彼は」



エステラ・サタニア
Estela Zatania
フラメンコ・ジャーナリスト

70年代よりフラメンコに親しむアメリカ出身のフラメンコ・ジャーナリスト。

©Paco Manzano

「もちろん、まだ巨匠と言われる歌い手達は残っているが、マヌエルは、すでに風前の灯の様を呈すこのスタイルの、最後の、代表者だった。彼の死をもって、クラシックなスタイルのカンテの時代は、終焉を迎えたと言わざるを得ないだろう。私が愛する歌い手達は他にもいるが、それでも、あの声がもう存在しないことに、とても深い悲しみを覚える。マヌエル・デ・ロス・サントス・パストール"アグヘータ"の、あの荒々しい、終わりの無い怒りと激情の声に。

私がマヌエルとよく会っていたのは、70年代、彼が私の友人のアメリカ人バイラオーラ、ティブーと付き合っていた頃だ。その頃の思い出は、これと言って思い出さないが、4、5年前、彼の娘ドローレスがヘレスのフェスティバルで歌ったときのことは、良く覚えている。マヌエルは、自慢の娘の晴れ舞台を見に来ていた。私はその喜びで崩れおちそうな顔を見て、こんな人間的な、無防備な彼の顔は、見たことがないと思ったものだ」

©Paco Sanchez

ファン・カルロス・トロ
Juan Carlos Toro

フォト・ジャーナリスト

ヘレス出身で、現在、ヘレスの町の"壁"に、この町のシンボルとも言うべきフラメンコたちの画像を映し出すプロジェクト「プレゼンシアス」を展開中。

「僕が「プレゼンシアス」の企画を立ち上げたとき、ヘレスを代表するアーティストの中に、アグヘタは絶対入れなければと思っていた。でもみんな、マヌエル・デ・ロス・サントスは難しい人だから無理だと言った。そして初めて彼に電話して、彼の写真を撮らせて欲しい、そして、その写真は後で街角の壁一面に映し出される旨を伝えたとき、当然のごとく、彼は〈ノー〉と言った。でも僕はそれでもめげず、もう一度電話して、君の友人パコ・トロ(画家)は僕の叔父だと伝えたら、彼は態度を軟化し、家に来ていいと言ってくれたんだ。

写真のセッションは二度行わなければならなかった。一度目はシャッターをパシャパシャっと押しただけで、〈それで十分だ〉と言われてしまったから。

その後、彼が電話で、"壁"はいつになるんだと聞いてきたので、前回の写真は良い物がなかったので、もう一度取り直す必要があると伝えた。彼は承諾してくれて、今度は歌ってくれて、その姿もとらえる事ができた。

彼の家は5回ほど訪ねたが、その度に、フラメンコ界の色んな話をしてくれた。でも僕は写真家で、話は良く分からなかったので、残念に思って、友人のパコ・サンチェス・ムヒカを連れて行った。それで、インタビュー映像も残すことができたんだ。

彼が亡くなったことは、まず友人として、とても深い悲しみを覚える。知り合っていくうちに、この人はきっと100歳まで生きるんだろうなと、勝手に思っていたんだけど、彼の病気のことは全然、知らなくて……。そして、僕が5年を費やした「プレゼンシアス」が、やっと完成した今、協力してもらったマヌエルに見てもらえないのは、本当に残念だ。フラメンコ界にとって、こんな損失はもう二度とないだろう。彼の存在が、その才能と純粋さにおいて、唯一無二であったように」



ファン・カルロス・トロ（右）
© Juan Carlos Toro

ドミニク・アベル
Dominique Abel
映画監督

フランス出身で、モデル・女優を経て映画監督となったドミニク・アベルは、フラメンコの世界では、彼女がこよなく愛するカンタオール、マヌエル・アグヘータの人となりを描いたドキュメンタル『アグヘータ、カンタオール』（1998）の監督として広く知られている。彼女は、本誌のアグヘータ特集にあたり、どうしてアグヘータの映画を製作したかを、彼への熱い想いとともに、綴ってくれた。

彼と映画を撮った動機は何かと聞かれたら、私はいつもこう答える。彼の「全て」を知って欲しいからだと。

マヌエル・アグヘータが歌う、あの口元。それは歪んで、ひしゃげて、出ようとする音さえもさえぎる。愛想もへったくれも無い。時に言葉は破壊され、崩されて、聞き取れないこともある。でも、彼が素晴らしく歌ったときは、私たちを捕らえて離さない。そうして私たちは、言葉を超える情感の、囚われ人となるのだ。

この言葉を、こぶしのリズムで彩られた音のアクセサリーに変えてしまう歌い方は、ヘレス独特の物だ。トルタ、マヌエル・モネオ、ルビッチ、ミヒータ、彼らがその証だ。ブラスエラ地区には、今も尚、独特のスタイルが息付いている。

アグヘータの歌、それは、永遠の"円"だ。ソレア、シギリージャ、マルティネーテ、ファンダンゴ、ソレア、シギリージャ……、いつも同じ世界を回りながら、唯一無二のそれを、歌っている。彼は、自分の中に音を探す。それはいつも、キイキイと、傷口から漏れ続ける。そして痛みに直接訴える、ハーモニーの少ない、メロディーの無い、モノトーンなカンテを歌う。そんなことが出来る歌い手はとても少ない。

また、消費社会を忌み嫌う、彼の頑固な性格も、知っておくに値する。そして、その社会を否定する態度が、歌い手としてのキャリアに、高い代償を払わせることになったことも。私は、もう随分前から、彼に憧れ、慕い続けている。けれど、友人であっても、彼は本当に難しい人だったと言わざるを得ない。彼は誰の生まれ変わりでもない。彼は、彼でしかなかった。彼は、彼自身の生まれ変わり。でも、ナルシストだったという意味ではない。彼は、いつも、どんな時も、彼だったということだ。

アグヘータは、録音したアルバムも、自分について書かれた記事も、何一つ持っていなかった。彼の基準は、全て、自分自身だった。彼は孤高なアナーキストであり、そして他を排斥し、自身の価値観を頑なに貫くその怒りにも似た感情を、まるで天から受けた使命のように、一心にカンテに注いだ。

もし、私があの映画を撮らなかったら、世間は、この全てを知ることは出来なかっただろう。彼の行動には、いつも、彼独特のやり方があった。骨の髄までフラメンコなやり方が。撮影当時、私はすでに、彼と17年間の付き合いがあったから、彼が思うカンテのあり方や、自分自身のことを、気負い無く話してくれるだろうという確信があった。だから私は、私が思う、彼の一番素晴らしい面を引き出すよう、彼を導いた。彼が獰猛で偉大な牛で、私がそれを捌く闘牛士という感じだろうか。彼の素晴らしさをもっと伝えることができるように、それが、私がこの映画で持った使命だった。

マヌエル・アグヘータが私にとってどんな意味を持っていたかは、容易に説明出来ない。彼がいなくなって、私がどれ程、孤独で、心細いかは、誰にも分かってもらえないだろう。

彼のアルテがわかる人は少ないが、その中でも、本当にわかっている人はもっと少ない。しかし私はその一人だと自負している。彼と出会ったことで、私は、摩訶不思議な、想像もつかない世界へのドアを開いた。そしてそこには、モラオが言った、ダイヤモンドの"原石"が眠っていた。

その生涯で、彼の歌が、十分な賞賛を得たとはいえない。彼の歌は、誇りと情熱を持って彼が受け継ぎ、守った伝統であり、そこには"怒り"が篭っていた。しかしそれは、投げたら戻ってくるブーメランのように、常に共存する彼の繊細さの裏返しであり、はたして、それを理解した者が、どれだけいただろうか。彼の歌は、何度も聴かなければ分からないのだ。ずっと、心に届くまで。人は言う。「人々はカンテに敬意を払わない。カンテがわからないから。カンテの深い闇を理解するのは難しい。だから、深く聴かなければならないのだ」。そして私は彼に、「私はあなたの歌に痛みを感じる。私は、それだけで良い」と言った。理解する、なんて必要ないと私は思うから。

私は、嘘と偽善が渦巻く、お金を糧とした、野蛮で軽率で腐敗した虚像の時代を生きていると、日々思う。そんな中で、彼のような真実、魂に入り込むアルテ、唯一無二の情熱と生きる力を持った人を失くしたことは、本当に大きな損失であると。しかし、フラメンコ識者たちは、その震撼たる事実に気づいていない。最初は、ただそう感じただけだったが、今は、残念ながら、私はそう確信する。そしてそれは、とても深刻な問題だ。しかも、マヌエルの死によって、彼が守ったカンテのページは閉じられたと思う者がいれば、それは大きな間違いだ。それはまだ、決して閉じられてはいない。彼の娘ドローレスも、そして息子アントニオも、前にも増して良い歌を歌っている。"識者"たちが言わないのなら、分かっている"者"、そして、それを必要としている"者"たちの一人として、私が言おう。息子アントニオ・アグヘータには、その"価値"を、絶対に認めてあげなければならないと。

スペインは、フラメンコの母国であるにも関わらず、このアルテの高みに、追いつこうとしない。だからこそ、マヌエルは、未亡人となったカナコに、自分の遺灰を日本で撒くように頼んだ。それは、このことを雄弁に物語る。彼が取った、非常に象徴的な、前代未聞のジェスチャーだ。そして私は、「アグヘータ、カンタオール」で見せた、彼の輝かしい笑顔を、これからも抱いて行こうと思う。

最後は、マヌエルとの思い出で、この追悼文を締めくくろうと思う。マヌエルとの思い出は沢山あるけど、いつかはどこかで書かなくちゃと思っていたとっておきの話が、一つある。

80年代初頭のある日、パリのチュイルリー宮殿を、マヌエルと一緒に散歩していたとき、私たちの後ろを観光客のグループが追い駆けてきた。どこから来た人たちなのか、英語でもないし、イタリア語でもロシア語でもないし、全然知らない言葉だったので、私には分からなかった。すると、彼らが興奮して、マヌエルにサインを求めるので、マヌエルが焦って「この人たちは、何なんだ！ 俺はこの人たちを知らないぞ！」と私に助けを求めてきた。それで、よくよく聞いていると、彼らは「アラン・ドロン！ アラン・ドロン！」と叫んでいて、私はビックリして笑ってしまった。

一体、何がどうなったらマヌエルがアラン・ドロンになるのだ！ それで、「あなたがアラン・ドロンだって！」と彼に言うと、彼は「アラン・ドロンって、誰？」と言うので、私はまたまたビックリしてしまった。「有名な映画スターよ……」「何言ってんだ！（笑） じゃあ、サインしてやろうかな……」するとマヌエルは紙に「A」とだけ書いて、彼らに渡した。それは、字が書けなかった彼が書けた数少ない文字だったんだけど、とにかく、観光客たちは、アラン・ドロンからサインをもらったと、大喜びで去って行った。

彼が初めて携帯電話を持ったときも、大騒ぎだった。

まず、どうやって使うのか分からない。その上、話したくない人から電話が来た。それで、悪態をつきながら、携帯を鍛冶台に乗せ、かなづちを手にもち、一・二・三で振り下ろした。携帯はものの2分で粉々になった。

ドミニク・アベル
©Manuel de la Fuente Chacón

ドミンゴ・ルビチ
ギタリスト
（取材協力／石塚隆充）

俺にとってマヌエルは特別な人で、普通の人と違っていた。なんて言っていいか分からないけど、まったく秩序のない、野性的な人間だったよ。現代の人間ではないからね。野原で狩りとか、鍛冶で働いたりして育って生きていた人間だから、一般人とはかけ離れている。とにかく彼は自然と親しむのが好きだったんだよ。都会は嫌いでね。

マヌエルの家でバーベキューした時だけど、トレイに焼きたてのバカデカイ肉がゴロゴロ乗っかってるんだ。とにかくバカデカイやつ。それで彼にチェレータを頼むとさ、そのバカでかい肉を串に刺して「ホラッ！」って差し出すんだよ。それも500gくらいの肉の塊を5、6個串刺しにして。こんな調子でとにかく粗野だった（笑）。

でも、時には愛嬌たっぷりにチステ（笑い話）を話してくれたよ。鍛冶屋で俺のオジーちゃんと働いていた時のこと、ギタリストのパリージャのお父さんと一緒に仕事をし始めた時のこと。カンテのことを聞くと「この歌は俺の親父が歌ってた」とか、ね。

初めてステージで彼の伴奏をしたのは17、18歳の頃だったかな。マヌエルの歌はマヌエル・トーレをはじめ、俺のオジーちゃん（ルビチ）やマヌエルのお父さん（アグヘータ・ビエホ。ドミンゴ・ルビチの祖父の弟）が歌っていたアグヘータ一族に伝わる歌だろ。俺はそれを聞いて育ったんだ。だから彼とステージで演奏するのは自然なことなんだよ。

サモラで演奏した時や、ロタのフェスティバル、彼の家で演奏した時も素晴らしい歌だった。最近では2015年のヘレスのフェスティバルかな。とにかく数々の素晴らしい歌を聞く瞬間があったよ。

マヌエルと一緒に過ごして嫌なことは、俺は一度も無かった。他の所であったかどうかは知らないけどね。でも演奏前は誰も彼に近づかなかったな。楽屋にはマヌエルの奥さん、そして俺とうちの上さんくらいだね。彼はシャイで特殊な人間だったのかもね。

マヌエルの伴奏は凄く楽しかった。だから時間があっという間に過ぎていった。だって彼のカンテはフラメンコの辞書みたいなものだろ。いつも横で彼の歌う全てを感じられたよ。同じ歌詞でも、聞くたびに、この前と全く別のものになってるんだ。そう、初めて聞く歌になってるんだよ。

彼は歌を邪魔しないギターを好んでいた。自分の準備しているモノを弾くんではなくて、カンテを伴奏しろと。マヌエル・モラオ、マノロ・サンルーカル、エンリケ・メルチョール、モライートとか、ヘレス周辺のギタリストとのライブ、録音とか沢山あるはずだけど、彼が求めていたのは歌の伴奏のみするギターだった。だから長いファルセータは必要なし、色々弾くギターを好まなかった。短いので良いんだよ、カンテの伴奏なんだから。

彼がステージに上がると観客は皆、

追悼特集

マヌエル・アグヘータ ヒターノの歌

今日はどんな歌を歌うか期待と興奮で胸がいっぱいになっていた。同じ舞台に4、5人歌い手がいると、皆が口を揃えて『これから俺は何をやりゃーいいんだよ』と言うんだよ。

もしもカンテが好きならマヌエルの歌を好きでないと、それはオカシイことだよ。彼はこの世に沢山の歌（CDやビデオ、カンテ）を残してくれた。それに、娘で歌い手のドローレスやアントニオをこの世に送り与えたことも、今後のフラメンコ・アフィシオナードにとっての遺産で、俺たちを満足させてくれる。

天国で俺のパパとかモライート、この世から去っていったヘレスのアーティスト達と最高のフィエスタで楽しんでほしいよ。

エンリケ坂井
ギタリスト

マヌエルの初期の録音は素晴らしい。ことに1970年の「ピエホ・カンテ・ホンド」には私も唸らされた。

70年といえばパコやカマロンなどの登場によってフラメンコの流れが再び変わり始める頃だが、そうした動きとは全く逆行した次作「シエン・アーニョス・アトゥラス」や「ポル・デレーチョ」は痛快だったし、その後も全くブレずに活動し続けた事には敬意を表する。

マヌエルとの間にはいくつかの思い出がある。84年初来日した彼は数ヶ月滞在、東京を中心に多くのコンサートを行ない、私も何度か伴奏したが、最終日池袋の地下3Fのスタジオでやったコンサートは素晴らしかった。

この時マヌエルはペペ島田のギターと共に乗りに乗って歌い止らず終わったのは夜11時、最後に歌ったシギリージャは本当に凄くて思わず身震いする程だったが、ビルの閉まる時間を過ぎてしまい後で私は管理人にこっぴどく怒られる羽目になった。しかもこのあとマヌエルとはもめて結局喧嘩別れ、招聘した東経大の萩内教授は我が家に避難した。

もうひとつは88年セビージャのビエナル音楽祭に出演した夜、グアダルキビール川の河原にあった友人の鍛冶場にいっ緒に行って、そこで焚き火を囲みマヌエルが朝まで歌ってくれた事だ。ビエナルに関しては色々大変だったのでこれで報われた……という気持ちだった。

又、彼の持つアフィシオンの一端も垣間見た。ある時劇場でチョコラーテが歌っているのを聴いていたら袖幕の影でオレ、オレ！と叫んでいる男の声がする。チラリと顔が見えたらマヌエルで、彼はこよなくチョコ様を尊敬していたのだ。

あと1回はやはり劇場で、どういう訳かマヌエルがトマサ（マヌエル・トーレの姪）といっ緒に出て来て、ひとりずつ歌ったのだが、トマサが歌っている間マヌエルは実に嬉しそうに彼女のカンテを聴きハレオをかけていた。

アナーキーなで唯我独尊のマヌエルは他の歌い手なぞ鼻もひっかけないが真に素晴らしいものには敬意を払っていたという事だ。

振り返ってみると、これ程強烈な個性を持ったアーティストは世の中と折り合いをつけるのは至難の技だったのだろう。今はそんな事からも解放され本当に自由になったと信じたい。



特別寄稿

堀越千秋
「マヌエーが死んだ」

マヌエー、おめえが死ぬとは思わなかった。おめえはいつでも生きていたし、いや、今でも生きているのかも分からねえ。さりとて、生きてるつもりでその辺をフラフラされると迷惑だから、言っといてやるが、おめえはもう死んだんだ。

おれも過去のことはどんどん忘れるという仙境に手が届きつつあるが、あれは何十年前だったかなァ、おめえは一度死にかかった。

ロタ郊外の荒野の一軒家に、うすら白い塩水の出る井戸を掘って、それを自慢して、秋だったのに水浴をしたら風邪をひいて、たちまち感染症になり、カディスのモラ病院のウビ（集中治療室）に、入院した。義兄弟のホアン（マヌエルの兄）から連絡があっておらァ飛んで行ったよ。医者は、「もうお手上げだ」と言って向こうへ行っちまった。意識モウロウとして寝ているおめえの脇で、おらァ「マヌエル！ 早く日本へ行こうぜ！」と叫んだ。すると、おめえはチューブだらけの腕の、親指と人差し指を合わせてスリスリしやがった。（金、という意味だ。）鍛冶屋のサルバドールとおれはそれを見て大笑いし、外へ出て皆にそれを告げ、すぐ脇の堤防によりかかって海を見て、泣いた。

それでもおめえはよみがえった。後日おめえが退院して元気になり、杖をついてよろよろと、一緒にプエルト・デ・サンタマリアの坂を上った時、しみじみおれは嬉しかったよ。


マヌエルとのこの世最後の写真。左マヌエル。右ミゲル。中筆者。2016年夏。

だけど今回は、従弟のミゲルから電話で『マヌエルが病気だ。今の内会っといたほうがいいぞ』と言われ、翌日マドリードからチピオーナ郊外の家に行った。（その話は他のブログに寄稿した。）おめえの顔は、いつもの黒さじゃない黒さで、おれは死相を感じた。ミゲルはいつも的確で、おかげでおれは義兄弟ホアンにもパコにも、死ぬ前に会えた。（昔、おれの女房を見るなり、『妊娠してる！』と教えてくれたのも奴だった。とんだ「受胎告知」だった。）

おれは今、ひしひしと寂しい。ことごとにアッ、マヌエルは死んだんだ、と思うようになったのだ。毎日のように、日本でもスペインでも、おれはおめえのカンテを聞いている。時々CDを聞きながら感極まって、おめえに電話して、「オレー！ エルメホンデルムンド！（世界一）」と言ってやったっけなあ。おめえは喜んでカカと笑い、「ところでミゲルの馬鹿がよ……」とか言うのだった。

ある月の美しいマドリードの晩に、歩きながら、おめえの唄うソレア「おまえの美しい顔を月がのぞき見しないように、帽子を深くおまえにかぶせた」を思い出して電話したっけ。するとおめえは、新作のマルティネーテの詞を唄ってくれたなあ。あれはつい去年のことだった。いや……3年前だったかな。

マヌエー、おらもそろそろお終えだよ。ミゲルはまだ何も言って来ねえけどなあ。（笑）

アグヘータのDVD『Agujetas en San Diego(1985)』リリース

Agujetas en San Diego (1985)

死の1ヶ月前、夫のマヌエル・アグヘタがDVDを製作すると言いだした。そのきっかけとなったのはアメリカの友人Mara Cohenから送られてきた一本の年季の入ったVHSテープだった。テープをヘレスのスタジオでデジタルに変換してもらい、選曲と編集をアグヘタが指揮し、写真選びもすべて自分で行った。

事の発端となったVHSテープは1985年8月5日、アメリカSan Diegoに当時存在したペーニャ・フラメンカで収録された。フランコ死後とはいえ窮屈極まりないスペインが我慢できなかったアグヘタは1980年代、アメリカ人を夫に持つ妹2人の居住するSan Diegoを拠点として北米を中心に公演活動を行っていた。

カバーの写真はアメリカ海軍の大佐で、しかもアーミッシュである義弟Robertoの制服を着て撮影したもので、数知れず存在する本人の写真の中でも特にお気に入りの一枚に数えられる。

アグヘタのトレードマークともいえる右頬の傷と黄金の前歯は、このビデオが録画されるちょっと前に刻印された。一人でメキシコを自動車旅行中、事故に遭ったアグヘタは、地元の救急病院で頬の傷を縫合された。欠けてしまった前歯6本はメキシコ流に24金で再構築された。

2015年12月24日、死の前日にヘレス病院に入院したアグヘタは、fabricaから届いたばかりのDVDの仕上がりにいたく満足し、「退院したらこれを売って、そのお金でponeora（卵をたくさん産むめん鳥）を飼おう」と私に語った。夕暮れになると台所に立ち、「今日はpapa con huevo（じゃがいもと卵の料理）だ」と言いながら私たち2人分の食事だというのにじゃがいも10個の皮をむき、巨大なフライパンに150mlのExtraヴァージンオリーブオイルを注ぎ、11個、12個の卵を勢いよく割り入れて強火でぐつぐつと煮るアグヘタ。あのひとときを私は二度と取り戻すことができないのだろうか。

文：池田佳奈子（アグヘータ夫人）

Vestida de negro luto	黒の喪服を着た自分の姿を
Te tienes que ver por la calle	お前は町で見なければならないだろう
Te has de hincar de rodillas	跪かなければならない
Para que me pare y te hable	私が立ち止まってお前に話しかけるためには

（"Agujetas en San Diego" 1.Solea より）

ライナーノーツより一部抜粋

本気だったら、パセオ

Paseo フラメンコ

No.386 2016 www.paseo-flamenco.com

8

追悼特集

マヌエル・アグヘータ

ヌメロの常識 Taranto

いよいよ来日! イスラエル・ガルバン

エスペランサ・フェルナンデスインタビュー

ヴォダルツ・クララ / 三四郎 / ラス・ミナス・プエルト・フラメンコ



ISBN978-4-89468-328-0

C0373 ¥733E

パセオフラメンコ

2016年8月1日発行(毎月1回1日発行)通巻386号

定価:本体733円+税